

## サッカレイの視覚

——『虚栄の市』について——

### 要 旨

サッカレイが書いた様々な作品のうちでも、とりわけ『虚栄の市』を読めば、彼の抱えていたいろいろな問題に突き当たる。ガンジス河のほとりに幼年時代を送り、その後イギリス本国へ戻って学校に入り、少年から青年に成長する。サッカレイは多感で神経質で、そのうえ母親にべったりなところがあつたから、明るく楽しい思い出というような類は少ない。更に、成人して一家を構えるようになる、生活の重圧がもろに彼の肩に掛る。幼女の死、妻の精神異常、家庭崩壊、正しく悲運が悲運を呼ぶという具合だが、そんな生活の裡側でサッカレイの文学はゆっくりと熟していった。

『虚栄の市』に彼の過去が揺曳していることは云うまでもない。サッカレイは自分の過去を癡視した人である。そこから人生を空と見る態度や、諷刺とか皮肉とか愛の精神、或は人物や事象の表裏を読む眼が鍛えられたものと思われる。『虚栄の市』ではそれらが作品を操る意図となり技法となつて強く働いている。本稿ではそのあたりを出来るだけ作品から離れないで述べてみることにした。資料の勢いに流されることなく、作品の具体的な生命に触れるにはどうすれば良いか。そうなるとやはり、立返ってゆく所は作品そのものを描いて他にない。これは文学作品を扱う場合に常に重要な問題である。

梅宮創造

—

サッカーレイが広く文壇の注目を集めたのは『虚栄の市』以後のことである。それまではせいぜい異色のジャーナリスト、或は才智ひらめく文章家という程度に止まった。卅代も半ばを過ぎて、悲喜こもごも、人生の苦味甘味を一通り知ったところでやっと光明を見たと言うべきか。

『虚栄の市』に先がけてサッカーレイは小説、評論、紀行文、それにバラッドや雑文の類まで幅広く書いていたが、いずれも一部読書人を除いて余り顧みられなかったのはディケンズの場合と好対照である。勿論、スノブ氏の名はかなり良く知られ、『クリスマス作品集』の第一号「パーキンズ夫人の舞踏会」などは随分愛読されたわけだが、それにしてもディケンズの華々しい名声には及ぶべくもなかった。これは一説に拠れば、サッカーレイが筆名をしょっちゅう変えたためだ<sup>(1)</sup>という。成程そんなこともあろうかと思う。評判なるものが作品の積上げの裡に徐々に加算されていくという考えに立てば、その通りかも知れない。

またこんなことも考えられる。そもそもサッカーレイは、小石をせっせと積上げて高く厚い壁を築いていくような性分ではなかった。積んだ石はしばしば崩れ、また初めから積み直さなければならぬ。若きサッカーレイが仕事や興味を転々と変えて、苦々しい精神放浪の数ヶ年を過ごしたことは各種の伝記に明らかである。深く根を下ろさずして枯れ、実はまだ青いうちに枝から落ちるといふことが何度もあった。外部事情がそうさせたと言ふよりも、これは多くサッカーレイ自身の性格に原因があった

と考えられる。

大学時代からの親友エドワード・フィッツジェラルドの印象は、サッカーレイの性格の一面を我々に伝えてくれる。フィッツジェラルドは云う。

「彼は非凡な才能の持主だ。しかし忍耐とか堅固な意志力に欠ける。情に流されることはまずなく、むしろ冷淡と云っていい。ひどく投げやりで、何でもすぐに飛びきながら飽きるのも早く、興味の持ち方に我儘なところがある。無理に装わぬ代りに、自分の力量にはいつも深い疑いを抱いているのだ。<sup>(2)</sup>」

フィッツジェラルドの眼に映っていたのは、正直で、無器用で、気儘な一懐疑家の顔である。この懐疑家はとかく物ごとの表裏を見ないでは気が済まない。それが慎重な観察に繋がる時もある。ここに、自他の文学や芸術や人生一般について、あれだけ大量に飽くことなく種々の雑誌に文章を試みた人物の姿が浮び上って来るのである。

しかし一方、こんなサッカーレイの性格を反映した記事や作品の奥から、ときとして「非凡な才能」が顔をのぞかせていることも事実である。例えば「モーニング・クロニクル」紙に寄せた文章のそこかしこに、文学や藝術を見るサッカーレイの視覚が強く働いている。

「——ここで明らかにディズレリの描写は力を失う。共感の欠如からでなく、経験の不足、また素材に馴染みきっていないがために。」又、「——これらの形や色あいがどれほど粗雑に見えようと、ここまで無頓着な技倆をものにするのはいかに困難か、画家が紙面に描き始めるま

でどれほど深く思いつめたことか、そのあたりを篤と知るべきである。」  
 こういふものの見方、視覚は決して生やさしいものではない。サッカ  
 レイは文学や美術について論評しながら、個々の作品の面に自己を映し、  
 自身の制作の夢を織るのだから、思うに、ものを見るサッカレイの眼  
 は相当肥えていたようである。懷疑の蔭に、日夜繰返される迷いやため  
 らいの裡に、他の作品をみつめて動かぬ冷徹な眼が光っていたことを  
 忘れてはならない。

一八三七年秋、「フレイザ」紙寄稿をもってサッカレイの文筆業の  
 始まりとすれば、それから『虚栄の市』まで約十年の歳月を閲する。こ  
 の十年間で、彼の文体は叩かれ、鍛えられ、やがて熟していった。サッ  
 カレイはこのときを待っていたようにも思われる。一八四七年一月、  
 『虚栄の市』分冊第一号発行を機に、サッカレイはこれまでの古衣裳を  
 脱ぎ捨て、堂々と自作に本名を付して新しい一步を踏み出したのである。  
 『ペンデニス』の主人公が、雑誌に記事を書いて詩集の一冊も出せるだ  
 ろうと高を括られ、それに応えて云う。「とんでもない。僕はあんたが  
 考えている以上の男だということを見せてあげよう。」<sup>(5)</sup>当時のサッカレ  
 イの胸奥に潜んでいた感情も、おそらくこれに近いものであったろう。  
 『虚栄の市』が作者の自信作であったことはサッカレイ書翰の端々か  
 らも窺える。しかしこれの発行については、すんなり事がはこんだとは  
 云い難い。執筆を始めたのは一八四五年二月、イタリアの旅から帰国し  
 た後である。初めの八章を書いて出版社に持込んだところが次々に断わ  
 られ、最後にやっと「パンチ」誌発行人のブラドベリ、エヴァンズ両氏

が原稿を引取った。四六年一月のことである。ところが身辺多事多端と  
 いうサッカレイ側の理由で、出版は更に一年後に延びる。その間、サッ  
 カレイは当初の原稿に大幅な推敲を施したらしい。<sup>(6)</sup>

サッカレイは毎月約束の期限を守って原稿を書き、分冊発行が進むに  
 つれ、次第に世の反響も高まった。シャーロット・ブロンテが『ジェイ  
 ン・エア』第二版の序に熱烈なるサッカレイ讃辞を載せたことは夙に有  
 名である。「——今日の作家に、読者の耳をくすぐるのではない別種の  
 言葉をも有する人物が一人いる。……」

シャーロット・ブロンテはサッカレイの言葉の裡に一種名状し難いも  
 のを見たようである。「深い真実」、「独得な知性」、「諷刺」、「機智」、い  
 ろいろ云ってみるのだが、まだその正体が掴みきれない。彼女はサッカ  
 レイの恐るべき才能に既に参ってしまったのである。

もう一つ、この序文から三月ばかり経って、シャーロットはW・S・  
 ウィリアムズに宛てサッカレイ崇拜のほどを洩らしている。「サッカレ  
 イの作品を読めば読むほど、あの方は唯独りで立っているという気がし  
 てなりません。自分の知恵、真実、感性に——この感性については本人  
 の口から何も仰言らないけれど、かつて書物に現れた中でこれほど本物  
 と思われるものはありません。——また自分の力量に、簡潔な精神に、  
 そして自己抑制力にひたすら賭ける人、サッカレイは正しく巨星です。  
 ……」<sup>(7)</sup>

巨星——Titan という形容はシャーロットの他の手紙にも散見する。  
 手紙は『虚栄の市』の作者に寄せる熱い敬慕の念に燃え立っているが、

それは同時に、サッカレイの才能に逸早く感応したシャーロットの鋭い直覚をも示している。

シャーロットが初めてサッカレイと会見するのは一八四九年十二月だから、『虚栄の市』完結後一年半のことになる。この頃にはもうサッカレイの声価は揺るぎないものとなっていた。この「巨星」を前にして、シャーロットの胸の裡はいかようであったか。<sup>(8)</sup>その後シャーロットは幾度かサッカレイに会い、『十八世紀英国諧謔家』の講演なども聴いたようだが、そうこうするうちに相手を見る眼も少しづつ変る。当然と云えば当然である。文学上の議論やら生活態度のくい違いなど、この間のエピソードはいろいろあるが、詳しくはギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテ伝』に譲りたい。<sup>(9)</sup>ただ一つ、サッカレイの長短を越えて、シャーロットの眼に「巨星」はいつまでも底知れぬ光を宿して遠く耀いていたことだけを付記しておく。

シャーロット・ブロンテより少し後れて、デヴィッド・メイスンとかG・H・ルイスなどもサッカレイの美点を称揚する側に立ったが、反対に弱点ばかりを強調するような批評も少なくなかった。『虚栄の市』以後のサッカレイ評価、とりわけ作者歿後の評価となれば、実に百家争鳴の観がある。サッカレイは伝記の類を書かぬよう強く遺言で禁じたので、その種の正確な情報が欠けたところで、暫くは誤解や偏見の流布するがままに任された。遺言の禁を犯して長女リッチイ夫人がサッカレイ全集各巻に文章を添えたのは十九世紀末のことである。<sup>(10)</sup>それを皮切りに、サッカレイの知られざる面が次第に明らかになり、新しい資料を盛り込ん

だ評伝や論文が頻々と出版され今日に至っている。

## 二

サッカレイは小説の題を思いあぐんでいたが、或る夜、いきなり寢台から跳ね起きて三度呟いたという。——Vanity Fair, Vanity Fair, Vanity Fair。これより前、『主人公なき小説、文と絵による英国社会の素描』という仮題<sup>(11)</sup>が考えられていたように、老若男女のひしめく社会相を描こうという意図は早くからあった。今、それを『虚栄の市』としたところに大きな意味がある。これを光源として、ここから発せられる「虚栄」の光は小説全体を照らし、作品を特異な色に染め上げることになろう。

「虚栄」は「空」、或は「無」に繋がる。作品を締括る「空の空なる哉」——*Vanitas Vanitatum* という表現は旧約聖書「伝道之書」に深く関わっている。「伝道之書」では万物流転の観をもって人間のあらゆる営みを無と解するわけだが、サッカレイはどうか。

サッカレイは五十に及んで、またしても「空の空なる哉」と題するバラッドを書いている。<sup>(12)</sup>詩行の蔭に聖書をいつも批判的に読んでいたサッカレイの顔が散見する作である。

身分卑しかりし者、今なんと栄えたるか  
華やかなりし者、今なんという転落ノ  
嗚呼、空の空なる哉

笑止千万、渦のごとき混沌よ

人間の労苦はまず正当に報われないということである。運命の女神はいつも皮肉な結果を人間の前に抛り出す。この出鱈目、この混沌は悲しむべきことか。サッカレイはそれを「笑止千万」と云うのである。人生の不条理を思えば可笑しくて堪らない。もがいても足掻いても成らぬものは成らぬ。浮かぼうと希えば沈み、沈まんとすれば浮かぶ。人生は一連の無駄、努力はすべて無益——実に可笑しいではないか、と。

しかしこの笑いは、腹の底から湧き出る明るい笑いではない。疲れた表情に弱々しく薄日の射すような笑いであり、裏を返せば冷んやりした聖書の真理が直かに張り付いている。——「これも亦迷妄なり。」人世のからくりが気付いて嘆くのも笑うのも勝手だが、どちらにしても、万物を操る力はびくともしまい。人間はかくも無力なのである。

サッカレイの笑いは悲しみと裏腹のもの、或は、悲しみを隠すがために笑うと云ったほうが適切かも知れない。経験を積み、人生を知れば知るほど、彼の悲しみは愈々深まったのである。再び「伝道之書」に曰く、「知恵を増やさば悲しみを増やす。」ここに人間の非力、癒しがたい悲しみは極まるのだが、サッカレイの小説がこの地点に根を下ろしていることはおそらく間違いない。

『虚栄の市』の次のような一節、こんなところに人世の笑いと悲しみは微妙に溶けあっている。——「おそらく虚栄の市で手紙にまさる結構な皮肉はあるまい。ひと昔前の親友とやら、今では憎んでいる其奴か

ら貰った手紙の束をのぞいて見るといい。それに姉上からの手紙の綴込み。二十ポンドぼちの遺産で仲違いするまでは、お互い、どんなに睦まじかったことか。息子がその昔丸字で書いて寄こした手紙なんぞはどうか。今はもう親の気持も知らないで、いつも頭を悩ませてくれる。それからご自分の書いた手紙の束。なんとまあ、長々と好きだの永遠の愛だのと書きつらね、さて肝心の相手はと云えば、成金のところへ嫁入りして昔の手紙をそっくり送り返して来るといふ始末だ。そんな女なんか、あなたのほうにしても、今ではエリザベス女王みたいなもので好きとかどうかじゃない。誓い、愛情、契り、秘密の打明け、感謝、どれもこれも後になって読み返せば、全く奇妙この上ない。」(第十九章)

「サッカレイの大きな欠点は皮肉の暴走を抑え得なかったことである」とはトロロップの評言だが、サッカレイの作中にこもる皮肉臭に辟易して、その裏を引繰り返してみるとところまでいかなかったようである。サッカレイに多少の銜いがなかったとは云いきれないが、実人生において諸事万端うつろいゆく様をいやというほど見せられ、そこから命がけで立上ろうとした男がその掌中に掴んだものとは何なのか。「皮肉の暴走」であろうか。

ここでもう一つ、「空の空なる哉」のヴァリエイションを挙げておきたい。「芝居の終り」というバラッドで、これは『虚栄の市』完結後に書かれた。

来たれ、富また貧、善また悪

老若それぞれ役柄を演ずべし

運命の力にこうべを垂れるべし

濁りなき心もて宜しく耐えるべし

このバラッドではサッカレイの態度がより直截な形を取っている。貧富や善悪に限らず、この世にはその他無数の対立概念が氾濫している。永年人間の脳中に棲息し、人間と共に生きて来て、恰も実体をもつがごとき概念群である。成功と失敗、勝利と敗北、幸と不幸、男と女、生と死、——しかし、これら二者の差が消えて一つのものに見える視覚がある。「濁りなき心もて」空を覗く眼ということになるが、そこから運命に身を委ねて「それぞれ役柄を演ずべし」というひたむきな態度が生れて来る。サッカレイには確かにこの種の視覚が具わっていた。彼の笑い、皮肉、諷刺などは皆この視覚を通過したものである。トロロープばかりでなく、サッカレイの皮肉に顔を顰める人びとは決して少なくないが、皮肉の裏に、生々しい現実が生々しいままに直視されていたことを忘れるべきではない。チェスタトンの炯眼が捉えた「サッカレイは何よりもまず受容的であつた」<sup>(15)</sup>という言がここに生きて来る。

『虚栄の市』の巻頭に掲げた「開幕にあたって」は一八四八年六月末、即ち全篇完結の折に書かれた文章である。ここに示された内容と小説末尾の一行、「人形たちを箱にしまつて、さあ、これで芝居はお仕舞」という締括りはそのまま結びつく。「芝居」、「人形」という着眼は、「空」の土壤に咲いた先の二篇の詩に通ずるものである。

「開幕にあたって」はまずこんな文章で始まる。「興行師は舞台の幕の前に腰をおろし、市を見下ろしている。その騒々しい様子を眺めながら、彼はひどく鬱屈した想いに沈むのである。——」芝居の興行師とは作者その人であろう。彼は人形の性状をつぶさに知り、意のままに操ることも出来るが、人形が一旦動き出せば生身の人間同然の姿となることも知っている。興行師は仕事柄それを希いながら、一方では気が重いのである。彼が見下ろしている市は、「騒音溢れる、およそ愉快とは云えぬ場所」という。こういう世界に今、彼はベッキイやアミーリアやドビンなどの人形たちを送り出そうとしている。彼等は飽くまでも人形であり、これから始まるのは芝居なのだが、反面これは現実の人間と現実の社会を再現すべきものである。興行師即ち作者の胸の裡はおよそ察せられよう。

作品の扉に、サッカレイ自身の手になる意味深い挿画がある。人形箱に背をもたせて寛いでいるのは「開幕にあたって」の興行師であろうか。但しこちらは市を見下ろす代りに手鏡を覗いて、どうやら己の顔に見入っている。「左様、これが虚栄の市。品の良い場所でないのは勿論、愉快な所でもない。ただ騒々しいばかり。」これこそ人間の寄り集まる場というわけだが、さて自分はどうか。そこで手前の顔を鏡に映す。自分もまた虚栄の市の住人ではないか。

興行師は人形を操るからといって決して神の座にはいないのである。自分もまた見えざる糸に操られ動かされていることで、やはり一個の人形に他ならない。もはや他人事ではないのだ。彼はベッキイやアミーリ

アなどの人形に手を引かれて芝居の奥へと踏込んで行く。そこが愉快な所でないのは承知の上で。

諷刺が他人に向けられているうちはまだいい。しかし諷刺の対象に自分まで含まれるとなれば、放たれた矢が途中で方向を変えてこちらに向かつて来るようなものだ。そのとき、諷刺する者の表情はどんなであろうか。蓋し挿絵に描かれた「手鏡」はサッカレイの制作態度を暗示して妙である。

世は俗物の花ざかりという『俗物誌』の各章がどれほど辛辣な諷刺に満ちていようと、題に添えて「一俗物の筆による」とあるのは「手鏡」と同じ意識の現れである。「——あなただだって俗物、そして私も、これまで俗物と称ばれて来た一人なのです。」<sup>(16)</sup>

人間である以上、皆同じ穴の貉ということになるか。サッカレイは世の俗物どもを次々に描いて、得意満面、溜飲を下げているのではない。この余りにも目出度い光景に人間一般の実相を見ているのである。<sup>(17)</sup>

人の世は乱雑で、出鱈目で、狂っていると云えるかも知れない。それを思えば憂鬱にもなる。また一転して可笑しくもなる。サッカレイの態度はこの両方に跨る。そして最後に行き着く所は、——「もしも滑稽が立派なら、真実はもっと立派で、愛は最も立派なものである。」<sup>(18)</sup>

諷刺の果てに愛があるとは、いかにも「受容」の作家らしい。サッカレイの諷刺は相手を傷つけない。人間の美点も欠点もおしなべて包みこみ、矛盾とか対立はずっと先の方で一つに融けあう。これを妥協、或は信念の欠如と見て非難するのはどんなものか。

「優柔不断なサッカレイ」とグリーグは云う。「彼に欠けていたのは確固として動かぬ心である。」<sup>(19)</sup>

登場人物に一たび生命を吹き込んだあとは人物が自然に動き、作者は彼等と手をつないで、彼等に随って行くというのがサッカレイの基本態度であった。そう云いながらサッカレイはときに彼等の情熱を冷まし、感傷を嗤い、努力やひたむきな振舞に皮肉を浴びせる。人間とか人生の真実がここで裸にされる代りに、何か力を奪われたような、空虚な印象が強まるのは否めない。この空ろな大地の上に立つサッカレイとは何者なのか。ここにグリーグは確固たる哲学を欠いた人、決して固定しえぬ人物の表情を見たのである。

デヴィド・セシルはサッカレイの文章技巧を賞揚した末に、こんな不満を洩らしている。「——サッカレイの精妙極まりないメロディ、管弦楽の編成にも似たあの豊饒な文章の奥に、微かながらも耳ざわりな、偽りの音が聞こえる。」<sup>(20)</sup>

「偽りの音」は何から生じるのか。サッカレイは自己の要求する創作理念を曲げて時代の道徳観念に屈した、というのがセシルの批評である。サッカレイに太く強い一本の作家精神が欠落していたというあたり、これもグリーグの論断に近い。

しかしここに、G・H・ルイスに宛てたサッカレイの手紙がある。「私の目的は登場人物めいめいが専ら虚栄に浸るのを放任すること、この暗い短音を全篇に奏でながら、処々に、それを越えるもの、人様に説くなんてとても出来ない或る立派なものを折々暗示することなのです。」<sup>(21)</sup>

サッカレイのこの控え目な、やや消極的な物言いは、我々には既に馴染みがある。サッカレイは時代の好ましからざる状況に正面からぶつかって事を為そうとした人ではない。ヴィクトリア朝時代の窮屈な道德観念や歪んだ社会風潮と干戈を交えんとするような作家ではなかった。サッカレイ文学の生命はひとえに精妙なる暗示にかかっている。それが見る人によって優柔不断とも、偽善とも取られたわけである。そういう見方はどんなものであろうか。

作品を精読すれば判ることだが、サッカレイはヴィクトリア朝時代の狭い観念の枠内で閉塞的のものを考えた人ではない。例えばクロレイ老嬢の恰も不道德を奨励するがごとき言動は、当時の社会通念をひそかに切り崩しているようなものではないか。この老嬢の支援がなければロードンの放蕩三昧は成立たず、ロードンは品行方正な男と化して、レベッカとの初期の接触なども生気を欠いてしまったことだろう。ジョージ、アミーリア、そしてロードン、レベッカの四人が初めて全員打ち揃うのも老嬢邸であり、レベッカを引止めてピット卿の恋情を募らせ、遂に結婚申込にまで立至らせたのも、因をたどれば老嬢の気まぐれに端を発している。

また第十一章末尾に「事実、彼女はお似合である——父親と息子の両方に」とあるが、これなども不道德の匂いのする一文に違いない。クロレイ親子双方がレベッカに傾くという暗示、しかもピット卿には妻がいるのである。サッカレイがこの一行を作中に置いただけでも、当時としては驚くべきことではなかったか。

無論、不道德な行為が地獄の底へと直下していくあの『ボヴァリイ夫人』と比べるなら、『虚栄の市』は道德の扱いについてまだまだ生ぬるいと云わざるを得まい。ピット卿の妻は病死して、ここで卿がレベッカに結婚を申込む道が開けるし、放蕩者のロードンは結婚後まるでだらしないばかりに家庭べつたりの男になり下がる。不道德の分子は一つ一つ作中から除去され、毒は悉く薄められていくかに見える。

ただレベッカの、あの冷やかな打算と破壊の衝動だけはいつまでも生き残るのである。レベッカに近づく者は皆魔法にかかったように、すぐさまその魅力に中つてしまう。ジョージとアミーリアの恋は純真な性格と見栄張りの性分との交わりから生れ、「一方は惚れこみ、一方は惚れさせてやろう」(第十三章)という二つの情熱の結果であるが、レベッカの恋はこんな型におとなしく嵌るものではない。レベッカはアミーリアなどと次元を異にした所で男に興味をもち、男を突き放す。圧巻と云うべきは、レベッカがピット卿の結婚の申し出に対応する件りであろう。「あゝ、旦那様」とレベッカは云った。「私は——私はもう——人妻なのです」(第十四章)

レベッカは最後の最後までピット卿の気持を惹きつけておいて、絶壁の縁に立ったところで容赦なく突き落すのである。レベッカが既に人妻だったとは、読者もまた知らない。啞然とするのはピット卿ばかりではあるまい。これが道德に屈した作と云い切れようか。

サッカレイの作品に終始一貫した哲学を探ろうとするのは的外れの謗りを免れまい。哲学のないところに「不徹底」も「敗北」もないではな



いか。その意味で、カーライルの見方はセシル等とは全く異なる。彼はサッカレイの気質、即ち「紳士気質」を取上げるのみである。「人間は紳士であるべし、俗物であるべからず、サッカレイの信じたのはこれだけだ。」<sup>(22)</sup>

紳士は極端に走らない。何事もほどほどのところで止める。これが更にデヴィッド・メイスンに拠れば、サッカレイの「無頓着」<sup>(23)</sup>——Poco-rantism となるわけだが、要するにこの種の見方は、サッカレイの作品を重厚な思想性から解放して、作者の気質に注目しようというものである。

サッカレイの気質を十分に理解するなら、彼の文学観というようなのは二義的なものとして背後に退いてしまふだろう。サッカレイがスウィフトをあれほど嫌ったのも、文学観の相違というようなものではない。一人の人間として、直接肌で感じられるところに嫌悪の感情を抱いていたのである。他人をとことん憎み押しつぶすという、スウィフトのあの冷酷無比な性格がサッカレイの気質に馴染まなかったのだ。愛人ステラの毛髪を入れた封筒の表書に、スウィフトの筆蹟で「つまらぬ女の毛髪」*Only a woman's hair* とあり、サッカレイはこの四語にスウィフトの素顔を認めて憤懣やるかたない。あれは真情を韜晦しているのだ、仮面だとスコットは取るが、サッカレイには断じてそう思えない。「——つまらぬ女の毛髪か。つまらぬ愛、つまらぬ忠節、つまらぬ純情、無垢、美。傷つき痛めつけられ、とうとう叶わぬ希いの苦しみから、また汚された愛と冷たい仕打から解放され、この世を去った最も優しい、つまら

ぬ女の心——つまらぬ女の毛髪と云うか。」<sup>(24)</sup>

人間の振舞や性格の現れについて、サッカレイのこの白熱した語気はどうか。人生はすべて虚しい、須らく諦め容認すべし、という標語の類では到底覆い尽くせないものがあるのだ。ここへ来るとサッカレイは、むしろジョンソンやゴールドスミス等にひどく近い性格を露わにするのである。この現実直視型の作家が空虚な現実の底に触知したものは、実は冷笑でなく皮肉でなく、悲嘆や諦めでもなく、人間どうしの愛であったと云えよう。「優しい気持 (Softheartedness)」というのが何よりも善いものに思われます」と彼はブルクフィールド夫人に書き送っている。<sup>(25)</sup>

### 三

『虚栄の市』の全篇が愛情の主題に貫かれていることは一目瞭然である。級友、親子、恋人、夫婦、同僚、親戚、知人、様々な人間接触の表裏に愛情の炎が燃え上ったりくすぶったりしている。これについては、まずサッカレイの実生活上の問題に眼を向けてみる必要がある。サッカレイは過去を熟思する人と云われるが、いったい彼の過去に愛情はどんなふう翼をひろげ、飛び立ち、またどのような痕跡を残しているか。サッカレイに関する伝記的考察は単なるエピソードの域を越えて、彼の作品制作の秘密に触れることになる。

サッカレイがパリでイザベラ・シヨオに遇ったのは二十四歳の夏である。イザベラは十九歳の小柄なアイルランド娘で、陸軍大佐の父が亡くなってから、母と妹の三人でパリへ移って来た。サッカレイは画家を志

して修業中の身であったが、忽ちイザベラを見そめて結婚を申込んだのである。「——君は家を出て、親しい友や優しい母上と別れ、この身入りの乏しい鼻のつぶれたむっつり屋の老いぼれと一緒にやっついこうという気があるか」<sup>(26)</sup>

イザベラの母は初めから猛反対をしたが、それを押しきって翌年夏に目出度く結婚、これから先サッカレイは現実の荒波をもろに被ることになるのである。

結婚生活の幸福は初めの四年間で終った。イザベラは妻というより、まだ母親にしがみついている子供のようで、よく引合いに出されることだが、デヴィド・コパフィールドの新妻ドラの性格に近い。しかし当のサッカレイは却ってこの現実処理能力のおぼつかぬ純真素朴な女を掛替のない妻と考えていたようである。サッカレイは画業で立つのを諦め、雑誌に文章を寄せて家族を養った。長女に続いて次女が生れたが、次女は八ヶ月後に死亡、そして一八四〇年五月、三女ハリエットの誕生後、妻の精神が変調を来すのである。サッカレイは『イエロウ・プラッシュ文集』、『キャサリン』、『パリ・スケッチ集』と書き進み、愈々脂がのって来た矢先のことであった。ゴードン・N・レイはこのあたりをサッカレイの人生の分岐点と見ている。「——一八四〇年秋から四一年冬にかけて、サッカレイは劇しい心痛の裡に数ヶ月を送り、このため彼の考え方は大きく変った」<sup>(28)</sup>

サッカレイはこのときになって内心結婚を悔んだものと思われる。あんなに恋焦がれ、頻りに恋文を認め、諸々の障害をはね除けてやっ手

にした幸福とは何だったか。これから妻は、また娘たちはどうなるのか。サッカレイは連夜もの思いに沈んだが、一方では仕事があり、ときとして生活窮乏の危機に迫られた。この苛酷とも云うべき逆境に放り込まれてサッカレイの人生を見る眼は否応なしに鍛えられ、深まったのである。彼の性分から、また努力もあって、サッカレイは自分の置かれた境遇を託つことが少なかった。それだけに、火は裡側で陰々と燃え、作品制作の執念を駆り立てたとも云える。この頃に書かれた『ホガティの大ダイヤ』がその一つの精華である。若夫婦の清らかな愛、貧苦の生活、子供の死を叙した件りに、サッカレイ夫妻の現実が色濃く影を落している。「これを綴ったインクには多量の涙が混じっている」とセインツベリは評した<sup>(29)</sup>。

『ホガティの大ダイヤ』第十三章の叙述から察するに、どうやら幼女の死がイザベラの精神変調を招いた大きな原因であったように思われる。無論サッカレイにとっても子供の死は言語を絶する悲しみに違いなかった。次女の死からまだ日が浅い時期に書いたこんな手紙さえある。「——小さな可愛い子供が死んで、私は今何を書いて良いやら……あの子を亡くして悲しいと云うより、あの子はほんの束の間、私どもを喜ばせてくれた仮そめの人だったのだと考えています。アニーが病気で死ぬか生きるかのときでも、ふと、神に命乞いをするなど間違いであるように思ったものです。苦しいときの神頼みなんて恐れ多いと云うべきで、もしお願いするとしたら、どうやって諦めたらよいか教えて頂くことになりましょう。しかし今の私は諦めきれないので——いや、そうじゃない

——もう、可愛いジェインに戻って来てくれとは云いますまい。あの子を人生の荒波と苦痛に晒したくはありません。<sup>(30)</sup>

これは屈折した感情というようなものではない。ゴードン・N・レイはこの文面に「痛恨の思い」を読むばかりだが、<sup>(31)</sup>それというのも、娘の死は生活の不如意と重なって倍の苦しみに脹らみ、複雑な痛みを伴ってサッカレイの胸を締めつけていた筈だからである。サッカレイは人生の何かしら動かしがたい強大な力を痛感していたに違いない。

次女が病死した翌年の五月に三女ハリエットが生れ、イザベラの耳に赤子の泣声は死んだ子の声にそっくりであったという。ここで再び『ホガティの大ダイヤ』の一節、母親が他所の子の泣声に死んだ我が子の声を聞く件りが思い起こされる。母親の発狂はこのとき既に始まっていたのである。

「——何だか苛々するのです。身体がだるくて、頭がまるで風船みたいにふわふわ飛んで行ってしまいそう。……<sup>(32)</sup>」これはイザベラが初めて異常を自覚したときの手紙だが、この頃サッカレイはベルギーへ取材の旅に出ている。三週間後に帰宅したときには、妻はもう尋常な状態ではなかった。

サッカレイは折々母宛に妻の様子を書き送っているが、一八四〇年十月初めにアイルランドの Cooke から出した手紙はまことに痛々しい。サッカレイ一家は九月半ばにアイルランドへ向かうが、途中、イザベラが船上から海中へ身を投じて自殺を図る。「——発見されたとき、家内は仰向けになって両手で水を掻いていました。それで沈まなかったわけ

すが、このことだけでも彼女の精神状態がおよそ察せられましょ<sup>(33)</sup>う。」

そんなことがあって、どうにかアイルランドに着いたものの、苦労はまだまだ続く。「——私がうとうとすれば、家内はすぐに起しにかかります。自分のほうは八時から四時までたっぶり眠って、目がさめると、私を一時も休ませてくれないのです。」<sup>(34)</sup>

用心のため妻と自分の胸を紐でゆわえて寝たこと、妻は独りにされるのを厭がるので寝台の傍に付添って原稿を書いたこと、等々、手紙の文面にはサッカレイの苦労が滲み出ている。そればかりではない。こんなことになってから、イザベラの母との関係が益々悪化したのである。<sup>(35)</sup>イザベラを郷里アイルランドへ連れて行ったのも、そもそも彼女の精神に善かれと願ったからなのだが、Cooke に住まうイザベラの母親はサッカレイ一家の来訪を喜ばず、彼等は已むなく近くに宿を取らねばならなかった。

イザベラの容態は少しも快方へ向かわぬまま月日が流れ、四二年冬、遂にサッカレイは妻を医者 (Dr. Puzin) の手に委ねるのである。かつての若く美しいイザベラは、サッカレイの脳裏に昔日の楽しい思い出と重なって、例えば「ブイヤベエイスのうた」<sup>(36)</sup>などにうたかたの夢のごとく蘇る。

今来て坐るは昔も坐ったところ

ほら、この椅子——独りじゃなかった

きれいな娘が寄りそうて

可愛い、可愛い顔が、やさしく見上げてた  
 甘い声でささやいて、にっこり笑えば心も和む

——今はもう、グラス傾ける相手もなし

しかしそれにも増してサッカレイに辛かったのは、子供と別れて暮らすことであつたようだ。家庭崩壊、一家離散の悲劇がここで頂点に達する。妻を病院に入れ、子供たちをパリに住む親許へ預け、サッカレイは単身ロンドンに留り原稿を書く。長女アンが当時を回想した文章には、卅前の父親が幼な子を連れて悄然と夜の馬車に坐っている光景がありありと窺える。「乗合馬車に夜通し揺られてパリへ向かう道すがら、父は私を罰したものです。馬車から降りて歩きたいのだけれど、誰も許してくれないので、私はしくしく泣いておりました。帽子をかぶった厭な男が窓に鼻など押しつけて、私が見ると、その人は恐い顔をするのです。父は私と乳母と赤ちゃんに對つて、端の所に坐つておりました。燐寸を擦つて小さなランタンに灯をともし、慰めにそれを持上げて見せるのですが、私は余計大きな声で泣くばかりでした。そこで父は声を落して云つたものです。『おとなしくしないと赤ちゃんが目をさますよ。そうしたら暗くしちゃうぞ。』それでも私は泣き止まなかつたので、赤ちゃんは目をさまし、これもまた泣き出しました。隅に坐つていた男がまた厭な顔をします。父は灯を吹き消し、あたりが急に真暗になりました。全く意外でした。これまでこんなに厳しく罰せられた例はなかつたのです。『明るくして、明るくして』と私は叫びました。『駄目だ。』闇の中に父

の聲が聞こえました。『泣き止まなきゃ、灯りを消すと云つたらう。』隅の男は始終ぶつぶつ不平を鳴らし、馬車はゆらゆら進み、そのうち私は父の膝の上に眠つてしまいました。……<sup>(37)</sup>

思えば幼少の頃からサッカレイは別離の悲しみを味わっている。四歳のときに父に死別、五歳にして生地インドを離れ本国へ戻るが、母はインドの地に留り、間もなく初恋の人ヘンリ・カーマイケル・スミス大尉と再婚する<sup>(38)</sup>。サッカレイは早くから親許を離れ、成人して結婚した後でも妻と別れ娘たちと別れて暮らさねばならなかつたのである。別離の経験はサッカレイの胸底に積り、発酵し、作品の中にいろいろな形で立ち現れる。

『虚栄の市』の展開に別れの場面はどれほど大きな弾みをつけていることか。ジョースとレベッカの恋の流産(第六章)から、ドビンの幾らか感傷的な別れ(第六十六章)に至るまで、作中処々に現れる「別れ」は、個々の人間関係や広く人生のからくりに近い思いを傾けた作者の心象風景に他なるまい。「別れ」にはどうしても一種悲劇的な情趣が混じりやすいが、サッカレイはそれに甘く浸ることなく、そこから飛躍していかに新鮮な眼で前方を見ているか。そこに別離の悲しみは愈々深まり、余計な夾雑物をきれいに払いのけて、恰も至純な一篇の詩と化しているのである。実例を挙げよう。

「ジョージは帰宅してアミリアの寢室を覗いた。妻は静かに横になり、どうやら目を閉じているらしい。ジョージは妻の眠っているのを見て安心した。先刻舞踏会から宿に戻ったときには、早くも連隊の召使が

来て出発の準備にかかっていた。静かにやるようにとの合図を男は了解し、準備は迅速に黙々と進められた。——寝室へ戻ってアミーリアを起こしたのか、とジョージは思案した。それとも彼女の兄に書付を残して出勤の報せを伝えて貰おうか。——ジョージはもう一度アミーリアの顔を見るために中へ入った。——（中略）——あゝ、なんて清らかな女だろう。なんて優しい、か弱い、孤独な女か。それに引替え自分とはなんと我儘な、乱暴な、罪深い人間であるか。——（中略）——彼女に恵みあれ、恵みあれ。ジョージはベッドの脇へ廻って眠っている妻の手を、小さなふっくらとしたその手を見た。それからそっと、枕の上の優しい蒼白い顔のほうへ身を屈めた。」（第二十九章）

アミーリアはまだ、良人が戦地へ出発することなど知らないのである。ジョージだけがこの別れの意味するところを既に予感している。

「ジョージが身を屈めたとき、二本の白い腕が優しく頸に巻きついて来た。『起きているわ、ジョージ。』哀れな女はこう云って、良人の胸に抱きしめられながら、小さな心臓が破れんばかりに泣きじゃくった。」

ここまで来てもなお夫婦の胸の裡は異なるのである。アミーリアは依然として何も知らない。良人が夜遅く帰って来て、孤独な若妻は感極まっているわけだが、別れの知らせがいきなり振掛るのはこの後なのである。サッカレイは運命の苛酷を敢えて語らないのに、読者は文章のはこびの裡にそれを痛切に感じる。次に続く一節で、万事を了解したアミーリアの驚きと悲嘆は行間に封じ込められ、無視され、それだけに彼女の無言の涕泣は人の胸を打つものがある。

「——アミーリアは目をさました。可哀そうに、何のために？ そのとき、連隊本部からラッパの澄んだ音が響きわたり、町の隅々まで流れていた。歩兵隊の太鼓、そしてスコットランド兵の鋭い風笛の音に町中が目をさました。」

以上のような箇所を熟読すれば、サッカレイの実生活上の重圧と深い思索の狭間から生れた結晶がどんなものであったか納得されよう。幼女の死、妻の精神異常、子供との離別、その他生活の表面に現れた大小数々の事件を思いつめ、掘り下げるところから何もかが生れる。悲哀や諦めや運命の暴力、また歪んだ愛と云ってもいい。レイはこれらを統括して云う——かくしてサッカレイは『虚栄の市』に至り漸く自己の「構造」formulaを発見した、と。<sup>(39)</sup>

#### 四

『虚栄の市』第一頁を開けば、忽ちサッカレイの世界が眼前に拡がる。「今世紀もまだ十代という、六月の或る晴れた朝のこと、チジック・モルにあるピンカートン女塾の立派な鉄門の方へ一台の大きな自家用馬車が近づいて来た。耀く馬具を付けた二頭の肥った馬に曳かれ、三角帽子と鬘をかぶってこれまた肥った馭者に操られ、一時間四マイルの速さでやって来た。馭者の隣にのんびり腰かけていた黒ん坊の従僕が、ピンカートン女史のまぶしい真鍮表札の前に馬車が止ったところでその鰐足を伸ばしにかかった。呼鈴を鳴らすと、貫禄のある古風な煉瓦家屋の小窓から、若い娘たちの顔が少なくとも二十ばかり突き出した。いや、鋭い

観察眼の持主ならば、このとき気立ての好いジェマイマ・ピンカートン嬢が、女塾長の客間の窓辺に置いたジュエリニームの鉢ごしに可愛い赤鼻をのぞかせているのまで目に留ったことだろう。」

この清々しい、しかもどこことなく滑稽味を含んだ語り口から、苦勞人サッカレイの表情を思い浮べるのは難しい。生活上の苦勞はきれいに昇華され、形を変え、文体の中に吸収されてしまっているのだろう。読者の心はいつしか女塾の鉄門の裡側へと招かれる。賑やかな女生徒たちの声、威風堂々たる俗物経営者ピンカートン女史、情深い妹ジェマイマ、そして二人の中心人物、アミーリアとレベッカ。読者はもう彼女たちに取巻かれ、小さな人間集団の騒音の真只中にいるのである。初めに描かれるのは「別れ」であり、一事の終りである。小説の始まりに終りの場面を当てるといふのは興味深いことだが、これはすぐ後に耀かしい次の始まりが控えていて、そこへ大きく飛ぶための発条の働きを為しているかと思われる。二人の若い女性は塾を去り、鉄門が閉じられると、門のむこうに早くも別の世界が開けているのである。

第二章に、アミーリアとレベッカが仲良く腕を組んで客間へ入って行くとする場面がある。ピンカートン塾の鉄門の次がこの客間の扉であり、扉を開けることで更に新しい世界が展開するのである。しかし、「客間の扉の前でレベッカは胸が高鳴り、どうしても中へ入る勇気が起こらなかった」という。これだけ取り出せば何でもない文章だが、作中にあるのはサッカレイの技法を窺わせる一文である。扉の前で暫くためらうレベッカは小心なのではない。事実はその逆である。レベッカの言

動には裏があり、作者は折にふれてそれを暗示することで、いわば表と裏と二層に重なった小説を作り上げていく。また、レベッカの裏面にまゝで気付かないのが一番近くにいるアミーリアであるところに、小説のもう一つの面白味が保証されている。レベッカの狡智とアミーリアの無垢、これがその後の様々な局面でどんな働きを示すことになるか。

第三章の見出しに「レベッカ、敵に面す」と掲げて戦さの場に喩えているのは、若い女性にも戦って勝ち取るものがあるというのだろう。『虚栄の市』の頂にはウオタルーの戦があつて、男どもはこの戦に勇氣や栄光や勝利の悦びを賭ける。一方、女性にも女性なりの戦さがあり、してみればレベッカの胸が高鳴るのも無理はない。客間の前に立つレベッカと前線に赴く兵士とは、比喩の働きで一つに重なりあうのである。さて、客間にはアミーリアの兄ジョスがいて、ここでレベッカは初めて敵に面会する。レベッカが才智のありつたけを傾け、女の力をふり絞って勝利を収めるべき相手が遂に現れたことになる。その相手とは、インド帰りの伊達男で肥満体の大食漢とくるから滑稽である。戦さにしる敵にしる、サッカレイの諧謔の筆にかかれば、おしなべてこんな恰好をとってしまうのだ。

アミーリアのほうはレベッカと対照的に、静かで落ち着いた恋の炎をゆっくりと燃え上らせる。こちらは戦さなどではない。レベッカを取巻く環境とアミーリアのそれとは、恋愛、結婚、その後の生活に至るまで巧みに対置され、双方のバランスが常に考量されている。しかもそれらが機械的に、机上の図式のように処理されているのではないところに、人

間や人生を見る作者の深い洞察眼が感じられるのである。

二人は諸々の環境の中で近づいては離れ、また珍しく衝突したりもするが、互いの繋がりはどこまでも陰に陽に保たれている。この均衡はまことに微妙である。黒と白という単純な対照化など、もとよりサッカレイの狙うところではなかったろう。サッカレイは情況や雰囲気の違いに応じて自在に文章を操れる作家である。二つの異なる性格、二つの異なる環境と云っても、それを平板に並べて描いてみせるのではなく、それぞれ変化して移ろう様を豊かな言葉の流れに乗せてゆく。チェスタトンの言を借りるなら、「いわば千ページに亙って千のタッチで仕上げてゆく<sup>(40)</sup>」のである。

レベッカとアミールは二つの典型である。この典型は紆余曲折を経る中で百様に变化する。「主人公なき小説」の作者は巧みに二人の体中から主人公たるキャラクターを引抜いていくが、それが抽象的な人物像へ向かわずに、却って生身の性格を極立たせて来るのは妙である。

ホガースが人間の顔の百態を描いてキャラクター研究を行ったように、サッカレイも人間の性格の表現について並々ならぬ関心を傾けた。『虚栄の市』分冊第一号が出る頃に書いた「パーキンズ夫人の夜会」などがその好例であろう。それぞれ固有の性格をもつ男女が夜会に参集して、会も愈々酣となれば、広間は人びとの発する騒音に包まれる。賑やかな夜会でありながら、そこにまた一抹のうら寂しい情緒が漂っていて、いかにも『虚栄の市』の作者による小品である。

作中人物の性格ということに関係して、E・ミューアの「劇的小説」と

「性格小説」の力学的考察は甚だ興味深い<sup>(41)</sup>。即ち、劇的小説の力は中心へ集中するが、性格小説は逆に中心から架空の円周へと拡がっていく。劇的小説は時間の進行と共に終局へ、完成された結末へと刻一刻近づく。然るに性格小説は初めにまず完成があり、それを土台に、そこから拡がる空間の効果を狙う。

ミューアに拠れば『虚栄の市』こそ性格小説そのものだというのである。登場人物がそれぞれ明らかな性格をもって相交わり、幾多の事件を惹き起こし、次々と波紋が拡がっていく。この拡がりにこそ大きな意味があり、小説の結末はさして重要でない。アミールが周囲の愛情に包まれているとき、レベッカは孤独の境涯にしたたか生きて、逆にレベッカが幸福をものにして華美な生活に浸るとき、今度はアミールの日常に暗い影がさす。人生の浮沈、運命の上昇と落下が繰返され、波紋は次の波紋を呼び、どこまでも限りなく続いていくかに見える。『虚栄の市』は人生の騒然たる連続模様を描いて終りなき小説の観を呈している。ただ、これが冗漫な風俗描写に墮していないのは、やはり登場人物の性格が明らかな典型として、その行動から心情に至るまで作者の妙手に引絞られ統御されているからであろう。

ここで、登場人物のモデルについて多少触れておきたい。モデルのこゝでは当時からいろいろ取沙汰されたようだが、サッカレイはいつも笑って取り合わなかったそうである。キングズレイの『酵母』にサッカレイとおぼしき人物が出ている。その人に向かって、「あなたの小説、とても好きですわ」と或る婦人が云う。「人物が生き生きしています。た

だ、あの准男爵、あれはやりすぎじゃないかしら。ああいう身分で、あんなに無粋なおかしいわ。」それに応えて作家は笑いながら云うのである。「あの男は、——作中殆ど唯ひとり、実在の人物そのものなです。」<sup>(42)</sup>

作者の手の加わった登場人物が恰も本物のようで、実在の人物が却って拵え物に見えるというのは興味深い話である。サッカレイのような小説家にとってモデルとは何かということが、こんな所に俤ばれる。

リッチイ夫人の語るところでは、或る朝玄関口に馬車が止って、黒いドレスを着た大そう美しい小柄な女性が降りて来た。その人はサッカレイに向かって懐しそうに、しかも堂々と挨拶し、それから大きなスマイルの花束を手渡して帰ったという。この女こそレベッカのモデルだという噂が広まったが、サッカレイは笑うばかりであった。<sup>(43)</sup>

おそらくサッカレイ自身、正確な返答に窮したのだろう。彼の脳裏に刻まれた多くの女性の片々が合成され、変色して、レベッカなる人物を形成していたものと思われる。作者と雖も特定の個人を挙げるわけにいかなかったに違いない。同様に、ドビンのモデルが大学時代の友人ジョン・アレンだとか、ジョスはサッカレイより二歳年長の従兄ジョージ・シェイクスピアだなど云われるが、先の『酵母』の一節からも知れるように、サッカレイはモデルに好みの色をふんだんに付けたことを忘れてならない。あのアミールリアについて、誰をそのモデルと云うべきか、作者自身迷うありさまなのである。「——結局、これまで書いたものを読み返してみても、私はずっと描いて来た女性は貴女でなく、母でもなく、

あの哀れな私の妻、——今では食事と一杯の黒ビールの他に何も考えない妻であることが判りました。」<sup>(44)</sup>

前述したように、『虚栄の市』では何よりも人物の性格が作品の太い柱の役割を果している。モデルは作中人物の性格形成にきっかけを与え、裡側から細部を支え、目立たぬところで作中人物に生命を吹き込んでいく。第八章以下の数章に、手紙や説明の文章でクロレイ一族の性格が紹介されているが、作者はかくも丹念に、粘りづよく、キャラクターを浮び上らせることに努めているのである。

低俗趣味に染りきったピット・クロレイ卿、道学者ぶった長男、放蕩者の次男ロードン、病弱な二度目の妻、そしてピット卿の腹ちがいの姉にして億万長者のクロレイ老嬢、ピット卿と仲の悪い弟ビュート、陰険なその妻、ざっとこんな具合に、それぞれ癖のあるクロレイ一族が作中に跳り出る。レベッカはこの多彩な人間集団の中に放り込まれ、ただ独り、胸内にひそかに燃える夢を実現しなければならぬ。性格と性格のぶつかり合い、その騒然たる光景が小説の緩慢な動きに伴ってゆっくりと展けてゆく。

それにしても、レベッカの幾度となく繰返されるあの奮闘は何を意味するか。レベッカは良き伴侶を、富を、高い身分や地位を求めているかのように見えるが、彼女の小さい狡猾な眼にそんなものばかりが映っていたわけではあるまい。「貴婦人になること、またそのように見られることがベッキイの人生目標であった」(第四十八章)と作者は解説するが、彼女のそんな目標は容易に達成されない。もしかしたら、永久に達成さ



れなくて構わないのかも知れない。クロレイ老嬢の不興を買い、スタイン卿との密会を良人に見付けられ、またアミリアと衝突もすればドビンの純真な気持を見せつけられたりもする。それやこれやの場面で、レベッカはときとして立場を忘れ、感動のほどを示すのはどういふわけなのか。

確かに云えるのは、レベッカには柔軟な心の動きがあるということだ。彼女は環境の奴隷でもなく、人生目標というような固定観念の奴隷でもない。常に流転し、動いていく運動の力そのものの象徴とでも云おうか。一方、アミリアはそうでない。こちらは飽くまで静止して変らぬものに心を留めようとする。ジョージへの愛、親子の情、過去の懐しい思い出、アミリアの心は何かとそういう所へ舞い戻る。移ろいゆく流れに漂うレベッカと、流れの底に不滅の結晶を求めるアミリアとは、どちらも人生の何がしかの真実を表しているものに違いない。この二人を作品中に等しく生かすこと、一見矛盾するような二つの力の均衡の上に作品世界を築くこと、そんなところにサッカレイの制作上の狙いがあったものと思われる。

サッカレイが人生を描くために女性を小説の中心に据えた点も見逃すべきではない。『虚栄の市』で、男性は背後に控え、底辺を支えて、音楽に喩えるなら伴奏の役を務めている。旋律を奏するのは飽くまでも女性なのである。女性の野望、女性の恋、嫉妬、見栄、派手な生活、家庭の幸福、母性愛、——諸々の女の感情が作中に横溢し、男どもはそれを駆り立てたり拒んだりしながらも結局脇役の位置に終始する。戦争がな

ければ連中は賭け事に熱中したり色恋にうつつを抜かして日を送るといふ次第で、危機が迫らないうちは男が本当に男として生きて来ない。それならウオタルーの戦に突入する場こそ、男性陣が生き生きと蘇るのに絶好の機会であろうと思われるのだが、作者はここで筆を抑えるのである。戦さの状況を書かず、戦さの背後に残された生活、つまり女の日常をどこまでも描こうとする<sup>(45)</sup>。ジョージの戦死を叙したあの有名な件<sup>(46)</sup>り(第三十二章)にしても、文章の力点はむしろ、何も知らずに良人の無事を祈る若妻の悲劇にかかっているように思われる。これは徒らに焦点を移して作品の統一感を損うまいとするサッカレイの明瞭な意図の現れに他ならない。

フィールディング以後、作家はもはや男を満足に描くことが出来なくなったという自説<sup>(47)</sup>を裏付けるかのように、『虚栄の市』では女の細やかな神経が前面に押出されている。

サッカレイは何故、敢えて女性に焦点を置いたのか。これはおそらく時代の変遷だけで片付けられる問題でなく、彼自身の資質に深く関係するものである。フィールディングをあれほど敬愛しながらも、フィールディングとの差異を一番明確に感じ取っていたのはサッカレイ自身ではなかったか。たとえシャーロット・ブロンテが「女性への偏見がある」と文句をつけ、レベッカその他の女性を捌く手つきに男性作家のいかにも男性らしい特色を残しているようにとも、サッカレイの筆は真の男性を描く方向へ進まなかった。男と女概念がやたら混じりあう精神風土に生きて、もはや真の男性もあるまいと思われるが、それ以上に、サッ

カレイの性格の女性的特質というようものが考えられる。筋の通った凛乎たる男性とか、英雄などは、『虚栄の市』の作者の性格と生活感情には合わなかったようである。

サッカレイはオーステインを飛び越えてフィールディングの作風に立ち戻るなどと云われるが、俄かには信じ難い。リチャードソン以来、フアニイ・バーニもオーステインもいわゆる女性の小説を書いて来たが、細かな着眼から手法に至るまで、それら先人の残したものをサッカレイの文学が適度に吸収していることは明らかである。

## 五

『虚栄の市』の特徴ということで、出版方法にまつわる問題も無視出来ない。月刊分冊の方式はディケンズなども早くから取入れていたが、これでいく限り、読者の興味を次号まで持続させておきたいと希うのは作者として当然である。「読者を笑わせ、泣かせ、待たせる」というのがディケンズの狙いであったそうだが、サッカレイの場合はそのままでいれない。ただ最後の一つ、「待たせる」効果について彼なりに考えていたことは事実のようである。『虚栄の市』各分冊の末尾がそのことを如実に示している。<sup>(49)</sup>

作者の解説が多く分冊の冒頭に語られているという点も同時に注意すべきである。分冊の末尾に意外な展開があって、読者はそこまで読みすぎて息をのむ。ひと月後、次号の初めに作者は軽い気持で読者に語りかけ、これまでのところを振り返って整理やら補充を行ううちに小説が再び

軌道に乗って来る。恋を訴えるピット卿の頭上にレベッカの決定的な一言が振り落とされる場面、ジョージの最後の別れや戦死する件り、これらは作中の山場として前にも取上げたが、山場であるだけに、その後続く分冊の書出しに作者は随分気を用いているように思われる。

書出しが巧くいけば、小説は再び読者の心を掴んで仕舞まで引張っていくことになる。そうして号の末尾に差し掛ったところで、作者はもう一度手腕のほどが問われる。最後の巧みな一行が示され、それを讀んだ読者は想像を逞しくして更に次号を「待つ」のである。そのあたりの勘所をサッカレイは充分に心得ていた。

サッカレイは安易に読者の歛心を買うような作家ではなかったが、それでいて、恰も読者を氣遣わんばかりに説明やら弁解を作中処々に盛り込んでいく。「作者と読者の打とけた話合<sup>(50)</sup>」と云えばそれまでだが、キャスリン・ティロトソンなどは、ここにサッカレイの「知性」を強調している。「――登場人物たちは、優劣おしなべて、殆どものを考えない。作品の知的な趣はひとえに作者の解説から生じるものである。<sup>(51)</sup>」

ここで云う「ものを考えない」とは、日常生活の表層に現れるくさぐさの問題の深い意味を探ろうとしない、ということであろう。確かに、登場人物たちは七面倒臭い議論などして読者を深遠な境地に誘うようなことはしない。その代り、彼等はいずれも現実に肌身を接し、現実の流れに沿って、きわめて現実的に「ものを考え」る。とりわけレベッカなどは、相手をつぶさに観察し、策を練り頭を働かせている。ただ水面下のほの暗い深みとなると、そこまで覗いてみることはまずない。そこで

作者が登場するというわけなのだろうが、作者は彼等から離れた所でものを見て、深場に漂う意味を押え、新たな観測を提示する。それはときに或る行為を弁明し、或る熱情を冷却し、冗長に墮すこともあれば重厚な味わいを生むこともある。愚鈍なドビンが少年の泣声を聞いて立上る場面を思い起してみよう。

ドビンは校庭の片隅で『アラビアン・ナイト』を読み耽っている。少年の泣声にふと顔を上げると、学校中のボスと目されたカフが小さな生徒に乱暴を働いている。だが作者は慎重に筆をはこんで、すぐにドビンを立上らせるようなことはしない。作者はどこまでも冷静である。愈々ドビンが立上ったかと思うと、今度はそこへ解説が入る。「彼はいったい何に動かされたのか。パブリック・スクールでの折檻など、ロシアの笞刑同様、既に認められたことなのだ。それに反対するなんて、或る意味で紳士らしからぬ振舞とも云えよう。多分ドビンは愚か者なので、その種の暴力に反抗心を燃え上らせたのかも知れない。」(第五章)

ドビンの義侠心に拍手したい思いで読み進めて来た読者なら、ここで一寸水を差された気分であろう。サッカレイの解説がどんな性質のものか、その一面がこんな所によく出ている。こういう冷めた眼が作品のあちこちに働き出すと、小説独自の律動を乱すという批判も解らないではない。或は逆に、ティロットソン女史のごとく、そこに「知的な趣」による統一を感じ取るような読みがあってもいい。ディケンズならばこうは書くまいと思われるのだが、そんな箇所は他に幾つもある。ディケンズは筆に熱がこもって来ると、抑えを利かすよりも真直ぐに突き進んで

しまう。然るにサッカレイは読者の気持を昂ぶらすよりも、多く冷ます方へ向かうのである。

セインツベリのこんな述懐がある。「ときどき思うのだが、サッカレイの人生を見る正確無比な眼が主人にいたずらを仕掛けていたようだ。彼ほど鋭くない、ぼんやりした才人ならばそんな心配はなからうが。」<sup>(52)</sup>蓋しサッカレイにはものがよく見えていたのである。見えすぎていたと云うべきかも知れない。

サッカレイは何事につけ厳密な論理操作に頼った人ではない。専らその見えすぎる眼をもって、生活の中から文章を練り上げた人である。「空の空なる哉」の延長上に不毛の文学が貧相な花を咲かせることになったのは、ここでやはり、文章の力というものを改めて痛感しないわけにいかない。「彼は文章のリズムでものを考えた。」<sup>(53)</sup>——これも亦、サッカレイの本質に触れた含蓄ある評言と云ってよい。

#### 〈註〉

(1) サッカレイが用いた筆名は、T. M., T. T., Charles Yellowplush, Key Solomons, Michael Angelo Timarsh, George Fitz-Boodle, R. H. Horne, Wagstaff, etc.

(2) Philip Collins (ed.) *Thackeray, Interviews and Recollections* (The Macmillan Press LTD, 1983) VOL. I, p. 28.

『虚栄の市』が成功を収めると、フィッツジェラルドは長敬の念をもってサッカレイから遠ざかるようになった。一方サッカレイのほうは、最晩年に、これまで一番好きだった友人は誰かと訊かれて、「フィッツ君だな。それに、ブルクフィールドと仲好しのときもあった。地獄で再会して、お互いにまた好い友達になれるだろう」と答えた。

- (8) Gordon N. Ray (ed.) *Thackeray, Contributions to The Morning Chronicle* (University of Illinois Press, Urbana, 1955)  
 サッカレイの寄稿文は無署名。レイ教授はサッカレイ書翰を基に、同紙三十一篇までの記事をサッカレイ作と断定した。以前、メルヴィル及びガリヴァーによつて発見された四篇と合せ、都合三十五の文章が現在サッカレイのものと思われる。
- (9) それまでも、数種の筆名に混じえて本名を露わにした例がなかったわけではない。例えば『キャサリン』巻頭の宣伝文『マイルランド・ステッキ集』献呈の辞、また「カラス大尉とント氏」(*Corsair*, U.S.A, 28 Sep. 1839)や「流行の女流作家」(Robert Tyas, London, 1841)にサッカレイの本名が見える。
- (10) *Works*, iii, *Pendennis*, VOL. I, p. 362. 及び Lewis Melville, *William Makepeace Thackeray*, VOL. I, (John Lane, the Bodley Head, London, 1910) p. 230. 参照。
- (11) 元の前稿は Pierpont Morgan Library 所蔵。フート・レキンに宛てた "...our profession seems to me to be as serious as the Parson's own." (24 Feb. 1847) と書つた手紙、また月刊の表紙に描かれた説教風景などから推して、サッカレイには読者を導くよう意図があつたであろう。
- (12) G. Tillotson and D. Hawes(ed.), *Thackeray, The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, London, 1968) p. 51.
- (13) サッカレイの眼に映つたシャーロットの印象は、'The Last Sketch' (in *Roundabout Papers*) に記されてゐる。シャーロットの正直一点張りの性格が、サッカレイにはほほえましく、やや窮屈でもあつたらしい。
- (14) E. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (Everyman's Library) 邦訳に和知誠之助訳『シャーロット・ブロンテの生涯』(山口書店、一九八〇年)がある。またシャーロットは、サッカレイの子供じみてお道化た一面を *Vilette* 第二十七章のポール氏の態度で描つてみせた。
- (15) Biographical Edition (1898—99) Introduction に寄せた文章。これは *The Two Thackerays*, 2 vols (AMS Press, Inc. New York, 1988) に収録されてゐる。執筆の経緯については、藤田清次『サッカレイ研究』(北星堂、昭和三十八年)一六四頁参照。
- (16) 一八四六年一月前にフレッド・クリ、モナムズ両氏と出版を約した折に、'The Novel without a Hero: Pen and Pencil Sketches of English Society' 一年後の契約書に、'Vanity Fair, Pen & Pencil Sketches of English Society' とした、更に月刊発行完結後に *Vanity Fair* の副題として 'The Novel without a Hero' を添えた。
- (17) *Works*, xviii, *Ballads and Tales*, p. 234.
- (18) Anthony Trollope, *An Autobiography* (The World's Classics, Oxford) p. 185. 皮肉が目立たなかつたので『ホスキンス』より秀作であるというローンは評してゐる。
- (19) *Ballads and Tales*, p. 232. 'The End of the Play' には *Christmas Books* (1848—9) 'Dr. Birch and his Young Friend' の末尾にせよ。
- (20) G. K. Chesterton 「サッカレイ論」(斎藤美洲訳) 世界文学大系40 『サッカレイ・ノート』巻末(筑摩書房、昭和三十六年)
- (21) *Works*, xv, *The Book of Snobs*, p. 3.  
 チェスタートの註記に "...Dickens, or Douglas Jerrold, or many others might have planned a Book of Snobs: it was Thackeray, and Thackeray alone, who wrote the great subtitle, 'By One of Themselves.' 彼のこの問題が重要視されてゐる。[See Gordon N. Ray, *Thackeray, The Uses of Adversity* (Oxford University Press, 1955) p. 377]
- (22) 『俗物誌』の載つた「ニンチ」誌が、'LONDON CHARIVARI' と称はれた雑誌だけあつて、サッカレイの筆触にも多分にお道化た傾向が見える。サッカレイは 'If the Truthful is the Beautiful, it is Beautiful to study even the Snobish.' (p. 3) など、このことについて言及してゐる。
- (23) 『俗物誌』最終章。この章は一八四七年二月に出たもので、『虚栄の市』発行は既に始まつてゐた。
- (24) J. Y. T. Greig, *Thackeray, A Reconsideration* (Oxford University Press, 1950) p. 2.  
 サッカレイの優柔不断は母親の精神的呪縛から脱却しえなかつたため、というリークは断じてゐる。

- (28) David Cecil, 'William Makepeace Thackeray,' *Early Victorian Novelists* (Constable & Co. LTD, London, 1934) p. 105.
- (29) Gordon N. Ray (ed.), *The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray* (Oxford University Press, 1945) 452. To George Henry Lewes (6 March 1848)
- (30) *Interviews and Recollections*, p. 37.  
カーライルと頼みの足跡と云う' Abraham Hayward, 'Thackeray's Writings' (Edinburgh Review, Jan. 1848) 424-426.
- (31) David Masson, 'Dickens and Thackeray,' *The Dickens Critics* (edited by George H. Ford), (Greenwood Press, Publishers, 1961) p. 32.
- (32) *Works*, xix, *The Four Georges, The English Humourists of the Eighteenth Century*, p. 172.
- (33) Gordon N. Ray, *The Buried Life* (Oxford University Press, 1950) p. 124.
- (34) *Letters* 93. To Isabella Shave (14 April 1836)  
尚' サッカレイがイザベラ宛に初めて書を送った手紙(現存のもの)は同年四月十日付。
- (35) ショオ夫人はイザベラを偏愛したが、その当時の事情は Philip (Chap. 25—28) にはのめかちられている。やや理想化されているようだが、作中人物シャーロット・メイネスの原型はイザベラである。
- (36) *The Buried Life*, p. 24.
- (37) George Saintsbury, *A Consideration of Thackeray* (Oxford University Press, 1931) p. 67.
- (38) *Letters* 134. To Mrs. Carmichael-Smith (March 1839)  
これは娘の死(三月十四日)から僅か半月以内の手紙である。
- (39) *The Uses of Adversity*, p. 203.  
サッカレイは娘の命田を必す日記を手紙に記したところ。
- (40) *Letters* 176. From Mrs. Thackeray to Mrs. Carmichael-Smith (4 August 1840)  
また医師 Stanley Cobb の手記もまた 'The Psychiatric Case History of Isabella Shave Thackeray, (*Letters*, VOL. I, Appendix vii) に拠れば、サッカレイが最初に妻の病を暗示した手紙は一八四〇年七月十八日付、母に宛てたもの(不明)で、'Isabella is better.' の文字が記されているとのことである。
- (41) *Ibid.*, 187. To Mrs. Carmichael-Smith (4—5 October 1840)  
イザベラは翌日二度目の自殺未遂を行ふ。
- (42) *Ibid.*, 187.
- (43) *Ibid.*, 188. To Mrs. Shave (11 October 1840)  
サッカレイはショオ夫人に宛て九頁に及ぶ長い手紙を認めたところだが、これは現存しなう。
- (44) *Works*, xviii. pp. 46—48, 'The Ballad of Bouillabaisse' (Feb. 1849)
- (45) *The Uses of Adversity*, p. 260.
- (46) 原文は *The Two Thackerays*, pp. 168—169.
- (47) サッカレイの母マンは十五歳のときペンガル工兵隊中尉ヘンリー・カーマイケル・スミスと出会い、恋仲となる。二人の結婚にはマンの祖母が反対し、ヘンリーの死を偽ってマンに諦めさせ、間もなくアンは傷心のあまりインドへ赴いてリッチモンド(後サッカレイの父)と結婚する。或る晩、リッチモンドは客を招き、やって来た客というのが死んだ筈のヘンリーであった。リッチモンドの歿後二年余りして(一八一七年十一月)アンはカーマイケル・スミス夫人となる。
- (48) *The Buried Life*, p. 29.  
レイ教授に拠れば、一八四〇年迄にサッカレイの文章は既に独自のものになつていたという。後の不幸な体験がその「独自の文章」に明瞭な焦点を与え、表現は完璧な形を取るに至ったと考えられる。
- (49) G. K. Chesterton 「サッカレイ論」
- (50) Edwin Muir, *The Structure of the Novel*, (The Hogarth Press, London, 1960), pp. 58—60.
- (51) *Interviews and Recollections*, VOL. I, p. 83.  
キングズレイの話が事実通りであることをリッチイ夫人も認めてゐる。尚、ジョン卿のキチルは Lord Rolle の手記に於て「See L. Melville, *Some*

*Aspects of Thackeray*, (Stephen Swift & Co. LTD, London) 1911, p. 153]

(43) *Ibid.*, p. 83.  
別で、インペッカのキチル候補として、ケンシントン広場の付近に住まうた或る女家庭教師が上げられてゐる。(See *Some Aspects of Thackeray*, p. 152)

(44) *Letters* 514, To Mrs. Brookfield (14 October 1848)

更に、『虚栄の市』第四十七章、ジョージ・カウントの様子を描いた箇所参照。

(45) 『虚栄の市』第三十章以下参照。戦士たちの活躍ぶりを簡潔に述べるサッカレイの筆致から推して、仮りに戦場の情景を描いたとしても見事な作が出来たさうと思われ。しかしそれはサッカレイの意にそぐわなかった。

(See *Works*, xxii, *Little Travels*, 'Waterloo')

(46) ミスギンはこの文章を『イリノイ』の一節と採った。(See *The Critical Heritage*, p. 87)

(47) *Pendennis*, Preface.

(48) Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties* (Oxford At the Clarendon Press, 1954) p. 21.

(49) 『虚栄の市』月刊分冊の発行は以下の通り。

| 発行年・月     | 章             | 号     |
|-----------|---------------|-------|
| 1847 Jan. | i—iv          | 1     |
| Feb.      | v—vii         | 2     |
| Mar.      | viii—xi       | 3     |
| Apr.      | xii—xiv       | 4     |
| May       | xv—xviii      | 5     |
| June      | xix—xxii      | 6     |
| July      | xxiii—xxv     | 7     |
| Aug.      | xxvi—xxix     | 8     |
| Sept.     | xxx—xxxii     | 9     |
| Oct.      | xxxiii—xxxv   | 10    |
| Nov.      | xxxvi—xxxviii | 11    |
| Dec.      | xxxix—xl      | 12    |
| 1848 Jan. | xl—xli        | 13    |
| Feb.      | xlii—xliii    | 14    |
| Mar.      | xliiii—xliv   | 15    |
| Apr.      | xlv—xlvi      | 16    |
| May       | xlvii—xlviii  | 17    |
| June      | xlix—l        | 18    |
| July      | li—lii        | 19—20 |

(50) *Pendennis*, Preface.

(51) *Novels of the Eighteen-Forties*, p. 253.

この「解説」はまた小説の息抜きとして効果が大きいと著者は述べている。

(52) George Saintsbury, *The Collected Essays and Papers of George Saintsbury*, (J.M. Dent & Sons LTD, 1923) VOL. II, p. 195.

(53) ヤンニンソンの註。[See Arthur Quiller-Couch, *Charles Dickens and other Victorians*, (Cambridge at The University Press, 1925) p. 152.] また、キマクローチの有名な言 'a flowing style' の回書中(p.150)も参照。

〈付記〉

一、使用した全集は *The Works of William Makepeace Thackeray*, 22 vols. (Smith Elder & Co, London, 1875) また註は付かなかった文庫版で、特に参考になった書が幾つかあるが、そのうち三冊だけを以下に挙げておく。

○ Peters, Catherine, *Thackeray's Universe* (Faber and Faber LTD, 1987)  
○ Tillotson, Geoffrey, *A View of Victorian Literature* (Oxford University Press, 1978)  
○ Trollope, Anthony, *Thackeray* (Macmillan and Co., 1892)

二、本稿の作成は昭和六十年跡見学園特別研究助成費によるものである。